
何重もの塔

日生 右月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何重もの塔

【Nコード】

N9564X

【作者名】

日生 右月

【あらすじ】

居合いの天才と居合いの名手。料理界の新星。奇怪な挑戦者。応戦者。真剣勝負。たまにギャグ。謎の塔。塔管理人と塔支配人。不穏な影。明るい悪。信頼。信用。裏切り。仲間割れ。

記憶

「何重もの塔。毎年何千人もの挑戦者が訪れる塔だ。そして、死者の数も半端じゃない。何故かというと、挑戦者と応戦する、応戦者が強い所為なんだ。めっちゃくちゃ強い。人間とは思えないほど強いらしい。だけど、何人いるか不明なんだ。だって、最上階まで行く人なんて、いないから。しかも、挑戦者は好きところで応戦者側になれるんだってさ。そうやって別の挑戦者と戦って自分を磨く。それから挑戦者に戻り、上の階へ行く、なんて人もいるらしいよ。だから、今現在、何人いるかは分からない。俺は最上階へ行ってみたい。そしてどんな強いやつが最上階にいるのか、会って、戦ってみたい。そこで死んだとしても俺は別にいい。お前が嫌だと言っても俺は行きたい。いや、行く。毎年、十月一日から三十一日まで塔は開いているんだってさ。そして、その期間内なら挑戦者が応戦者になっても、応戦者が挑戦者になってもいいんだってさ。逆にその期間内じゃないと挑戦者は入れず、応戦者も上には進めない。よく意味が分からないね。俺も分からない。だから十月一日に入って、三十一日までには塔を制覇する。噂だと最上階にいる人しか、制覇したことがないんだってさ。俺は史上二人目の塔制覇者になってやるんだ。無理じゃないさ。俺はその為に今まで修行してきた。そして、これからも修行する。俺が言いたかったのは『とにかく俺は強くなる!』ということだよ。じゃあ、その為に俺はまた修行して行くから。お前も少しは修行したほうがいいと思うぞ!」

遠い記憶。何故、覚えていたのかすら分からない、何歳だったかも分からない。そんな記憶。曖昧で不自然な記憶。信憑性なんてあったものじゃない。話の順序だって考えていない喋り方。俺が覚えていないだけだとしても酷い。

ただ、この話を俺にした数年後にはあいつは旅に出た。折角、俺

も修行をやりはじめた頃だったのに。

あいつは強かった。師匠と同等かそれ以上強かった。俺だって師匠よりも強いとみんなには言われている。だが、あいつ程ではないだろう。でも、俺はあいつを超える。塔とやらを制覇する。

そう思っていたのも1、2年前まで。今となってはすっかり忘れていた。

思い出したのは師匠の所為だろう。所為とは言っても思い出させてくれてありがたくも思う。ありがとよ師匠。

色々あって俺は塔に挑戦する。はつきり言って面倒だ。だけど塔にはあいつがいるかもしれない。俺はあいつと話さなきゃいけない。俺の役目を果たさなければいけない。塔を制覇するかどうかはともかく、塔に行き、あいつに会わなければならぬ。必ず。絶対に。

記憶（後書き）

あらずじに何だか思わせぶりな単語が並んでいます。しかし、ストーリーの計画がほぼ無し。登場人物を少しメモしてある程度。完全なる行き当たりばったりな物語。その日のノリと調子によって敵が変わってくる。技も変わってくる。性格も変わってくる。もっとしっかり計画を練ってからやるべき話です。最低でも週一投稿を目指しますが、私事により不可能になる場合があります。どうか首を長くしてお待ちください。

挑戦資格

「この何重もの塔、現在、何重なのか私たちにも分かりませんが！ただ、最上階には世界最強と謳われる人がいるのは間違いない！それが一発目かもしれないし、何十年経っても辿りつけないかもしれません！ 運はあなた方にあるのです！」

スーツ姿のおっさんがマイクを持って叫んでいる。確か、塔の管理人の幾重幾都とかいつてたかな。どうでもいいけど。

「あー、面倒臭え。何で俺がこんなことしなきゃいけないんだ」

「何言っているんですか！ 雷切師匠からのお達しでしょう。必ず達成しなくては！」

そう言うのは俺の友達の皿品碗器だ。背が低い癖に料理ばかり上手い。いや、料理と身長は関係ないか。

こいつは俺の方が誕生日が早いってだけで敬語を使ってくる。「そうは言ってもなあ……。俺は家でゲームしてたり、自由に修行しているだけでいいんだけどなあ……」

「それに、刃さんも乗り気だったじゃないですか」

「あの時はな。やっと師匠から旅に出てもいいってことだったからな。だけど来てみる。人はうじゃうじゃいるわ、変なおっさんが喋っているわで意味分からねえ」

「変なおっさんじゃなくて、幾重さんですよ」

正論ばかり言うやつだ……。何でよりによってこいつなんだ？料理が上手いくらいならもつと他にもいるだろうに……。

「では！ 挑戦資格獲得の為にここでバトルロイヤルをしていただきます！」

「はあ？ 挑戦するのに資格なんかいるのかよ……」

「仕方がないですよ。ここはちゃんと従いましょう」

「いいけどさ。バトルロイヤルだぞ。お前、戦えるのか？」

「頑張ります！」

碗器は拳を固める。がすぐに力が抜ける。これじゃ無理だろ。

「資格獲得出来るのはここにいる5万人の内、5千人のみです！」
いきなり10分の1にするのかよ。それにどうやって5千人だなんて数えるんだ？

「おい、碗器は俺の肩に乗れ！」

「え？ え？」

戸惑う碗器を肩に乗せる。

「絶対に落ちるなよ！」

「では！ 用意……始め！」

人が一気に動き、手に手に武器を持ち、近くの人に攻撃する。

「惨いねえ」

「そんな暢気なこと言っていないで、早く倒してください！」

「俺は戦いは好まないんだぞ」

「嘔吐かないで！ 早くしてください！」

しょうがないなあ。

俺は左腰に差している愛刀、大業物『空切水斬そらきりみずきり』に手をかける。

そして、『空切水斬』を90度回転させる。

深く息を吸い込み、

「居合かたなせい……刀背、首切」

抜く。そのまま前にいたでっかい男の首を叩く。男は何も言わず倒れる。

「こんな感じか？」

刀を戻す。

「スゴいです！ でも、まだ一人しか倒していません！」

注文の多いやつだ。注文が多いのは山猫がやってる料理店だけでいいぞ。

息を吸う。

「居合かたなせい……刀背、全方不注意ぜんぽうふちゅうい」

刀をとにかく振り回す。周りのやつらが倒れていく。半分爽快、半分退屈。やるならもっと強いやつがいい。

「スゴいです、スゴいです、スゴいです！ 人がどんどん倒れていきます！」

碗器が騒ぐ。倒れるのは当たり前だろ。俺が叩いているんだから。でも、何で誰も血が出ないんですか？ 不思議です！」

「だから当たり前だろ。叩いているんだから。」

「峰打ちを知らないのか？ お前、いくらインドア派だからってそれぐらい知ってるだろ」

「峰打ちですか！ なるほど！」

俺が『空切水斬』を90度回転させたのはそうすることによって相手を切ることが出来ないからだ。俺は血が嫌いだしな。返り血なんか浴びたくないぞ！

でもこのやり方、殺傷能力なしだが、持ちにくくて仕方ない。何せ、普通は縦に持って、手で掴みやすいのをわざわざ横に持って掴みにくくしている。どうせなら返り血気にしないで普通に持ちたかった……。

俺は『空切水斬』を振り回し、碗器が「スゴいです！」を182連発くらいした時に笛が鳴る。

「そこまで！ 今、立っている約5千人の方は10月中であれば、いついかなる時であろうとも何重もの塔に入ることが出来ます！」

約つて……。やっぱり数えられないんじゃないか。でも、まあ、結構人数は減っている。

おっさんは塔の中に入っていく。

「休みます？」

「そうだな。俺は疲れた」

そう言うところから出したのか分からないが鍋を取り出す。

「では、今からカレーを作りますから、1、2時間ほど休んでいてください」

「そんなには待たねえよ！」

「ええー」

何が「ええー」だよ。当然だろ……。

「俺はさっさと行って、さっさと帰りたいんだ」

「では早く終わらせるために腹ごしらえしましょう」

「またしても正論か？」

まあ、先は長い。それに塔に入ったらいつ飯を食えるか分からないからな。いま、食べておくのは悪いことじゃあないだろう。

碗器はどこから薪を集め、火を起こす。

塔の近くの適当な大きさの石に座る。そのまま俺は塔に寄りかかって眠る。

挑戦資格（後書き）

最低週一投稿と言っておきながらその日に投稿です。ここで出てきました『空切水斬』。当たり前ですが、（おそらく）実在しません。さらにそれを振り回すような人は、（知っている限り）いません。ご安心ください。

何故か管理人の名前が一番最初に出てきてしまいました。計画性のなさです。そして、気づけばまだ主人公の名字が出てきていませんでした。主人公なのに……。と嘆いている刃が目に見えるようです。そんな何重もの塔、次話がどうなるかは僕にも分かりません。その時の僕に訊くしかありません。それまで乞うご期待（して下さる方がいますように）！

夢

「もちろん俺の夢は何重もの塔の制覇！ お前は？」

その時、俺は何を言ったか覚えていない。あいつと同じで塔の制覇だったかもしれない。ふざけた師匠をぶつとばすことだったかもしれない。居合い切りを極めることだったかもしれない。

何にしても思い出せない。はっきりピンとくるものはない。

何故、夢の話をしていたのかも分からない。何故、夢を語る夢を見たのかも分からない。あいつがいなくなつた時に俺は全てを忘れてははずだった。なのに、今、また思い出す。何故だろう。

「あの師匠むかつくよな！。俺、師匠のことは嫌いだ」

俺だつて同感だ。あんなのは師匠じゃない。人ですらない。剣士だつたら剣士で自分の愛刀に執着すればいいのに、そんなことを一切しない。頑固なのに適当な師匠。

遠くから誰かが俺たちを呼ぶ。

「やばい！ 師匠だ！ 早く戻ろうぜ、刃！」

あいつは走る。俺は……動けない。

何故だ、何故だ、何故だ、何故だ。何でだ、何でだ、何でだ、何でだ。いつも、あいつばかり先走る。俺の先に行く。俺はあいつの後ろを歩くしかなかった。

だが、俺はあいつを確実に越える。越えてやる。動けない俺はここでずっと呟いていた。

「刃さーん！ カレー、出来ましたよ！ 起きてください！ おーい！」

碗器か……。いつも思うが変な名前だ。

「ああ……。今、起きる」

俺は欠伸をしながら石から立ち上がる。太陽が沈みかけている。

「もう夕方か」

「はい。大体4時くらいですよ」

「塔にはいつ入る？」

「いつでも。刃さんが行きたい時でいいですよ」

自分の意思はないのかよ。

「そうか。じゃあ、カレーを食べたらすぐ行くか」

「はい。分かりました」

碗器が満面笑みで返してくる。俺も自然と笑顔になる。

「どうかしましたか？ 急に笑って」

「いや、お前、いいやつだなと思ってな」

「はい？」

「気にするな」

碗器は不思議そうな顔をしながらカレーを器に移す。それを俺に渡す。

「えっと……カレー？」

「そうですよ。カレーです。ご飯はありませんからルーで我慢してください」

何でご飯がないんだよ！ ないのに何でカレーなんだよ！

「まあ、仕方ないか。ないんだったらな」

俺はカレーを食べる。美味い。純粹に美味い。

「どうですか？」

「うん。美味しい」

碗器は笑う。感情表現が豊かだ。

「お？ いい匂いがするじゃないか」

誰かが言う。

「食べます？ どうぞ」

碗器はカレーを渡す。俺は相手を見る。

「あ……」

一番最初に倒したでっかい男だった。

「あの、首、大丈夫ですか？」

「首？ 何の話だ？ それより、このカレー美味しいな」

俺が攻撃したのを分かってない？ どうゆうことだ。それに、あの技は受けてから10時間は師匠ですら立ち上がれない。それをものの2、3時間で立って、さらにカレーを食べているだと？ こいつは何者だ。

「おい、あんた誰だよ」

「おっと、まだ名乗っていなかったね。でも、まあ、今は名乗らなくてもいいかな。俺は剣商人だ」
名乗れよ。

「剣商人ってなんですか？」

「剣の売買をする人のことさ」

「何でそんな剣商人がこんなところにいるんだ？」

「塔の中の挑戦者、応戦者に剣を売るためだよ」
毎年大盛況するらしい。

「へえー」

碗器が感心する。

「じゃあ、俺はそろそろ中に入るかな。君たちも塔に入るんだろ？
気をつけなよ。縁が合ったらまた会おう」

あつという間にカレーを食べた剣商人は塔の中に入ってゆく。

「僕たちはカレーを全部食べてから行きましようね」

鍋にはカレーがまだ残っている。

「そうだな……」

俺は剣商人のことを気にしつつ、カレーを食べた。

塔前談議

「そういえば、僕、カレーを作っている間も考えていたんですけど、カレーが残り一杯分となったところで碗器が喋りだす。カレーのルーだけ、というのは中々辛かった。」

「さっきの刀背って技なんですけど」

「どうした？」

「あれ、『空切水斬』を横に持っていましたよね。だから、刀の背じゃないんじゃない……」

「細かいことは気にするな」

「え、どうしてですか。教えてくださいよー」

俺はカレーを地面に置き、『空切水斬』に手をかける。それを見て何も言わなくなる碗器。お利口だ。

「じゃあ、他に気になっていたことなんですか」

「なんだ？」

俺は『空切水斬』から手を離さず訊く。

「さっきの剣商人さん。僕たちは名前聞きましたよね」

「そうだな。答えなかったけどな」

「何である人は僕たちには聞かなかつたんでしょうか」

「知るか。塔の中で会ったら訊けばいいだろ」

「そうですね。そうですね！」

碗器が元気になる。

カレーを持ち、食べる。やっぱりご飯ほしい……。

「あのさ、碗器。今からでもいいから米、炊いてくれないか？」

「さあて、早くいきましよう！ あれ？ 刃さん、まだそれしか食べないんですか？ 置いて行きますよ」

人の話を聞け！

「さあさあ早く早く！」

そこまでの剣商人に会いたいか？

俺は碗器に促されて一気にカレーを食べる。食器を公衆トイレで洗ってきた碗器はリュックサックに鍋や食器を仕舞う。

「行きましよう、行きましよう！」

なんでこんなにテンション高いんだ？

何重の塔を見上げる。近くにいたけど、改めて見るとかなり高い。上のほうは雲でよく見えない。太陽がもう沈んでいて辺りが真っ暗ということもあると思う。だとしても高いのはよく分かる。見上げるだけで首を痛めそうだ。碗器は見上げすぎて引っ繰り返っている。「おいおい、大丈夫かよ」

ホント、なんでこいつなんだよ。つくづく俺は運の悪いやつだ。

料理が出来るならこいつが一番にしてももう少し強いやつと一緒にやらせてくれよ。そのほうが何もかもやりやすくなるはずだ。

はつきり言うところこいつは足手まといだ。どうにかしてくれ。こいつがいるくらいなら俺一人でいい。いつそ、今ここで切り刻むか？ いやいや、そんなことを考えては駄目だ。料理は美味いんだ。それでいいとしよう。どちらにしる、敵は俺が倒す。なら、味方は弱いほうが邪魔されないんじゃないか？ どうなんだろう……。

「さて！ 中に入りましよう！」

起き上がった碗器が言う。元気なやつだ。

塔の入り口は大きい。それしか表現が見つからない。塔に穴が開いているだけ。何なんだ、これは。

「わー。大きい！ 大きい！」

碗器がはしゃぐ。入り口ではしゃぐやつなんて初めて見た。対処のしようがない。誰か助けて。

「よし！ 行きますよ！ 刃さん！」

中に走っていく一人の小さな少年。それを呆然と見つめる大きな少年。どちらも同学年。誕生日が数ヶ月違うだけ。

「って、おい！ 待て！」

俺も中に入っていく。

塔前談議（後書き）

結局、刃の名字は明かされず……。最初の応戦者辺りで名乗らせよう。絶対に！

そんな決意を持ってやっと塔の中に入ってくれました。次からは塔内の話です。それまで乞うご期待！
していただけますように

塔内談議

「はあ、疲れました」

そりゃそうだ。もう塔に入って3時間。中は長い通路。脇には松明が火が灯されているだけで、少し薄暗い。

「もう駄目」

ずっと走り続けていた碗器は座り込む。

「俺が肩車してやるか？」

「お願いします」

碗器を持ち上げ肩に乗せる。栄養失調じゃないかと思うほど軽い。碗器が背負っているバッグのほうが重いだろう。

「このままだと日が暮れる。少し走るぞ」

「は、はい」

突っ込めよ！ とつくに日は暮れてるぞ！ そんなに力がないのか！？

俺は走る。碗器を肩車するぐらい大したことじゃない。どんどん走る。

「わー、刃さん速いです！ 速いです！ 僕よりも断然速いです！」

「そりゃあ、足が俺の方が長いからな」

「包丁で微塵切りしますよ」

肩から激しい殺気を感じる……。

「え！？ いや！ ごめん！」

そういえばこいつは身長のことを色々言われるとキャラ変わるんだった！ この時の碗器は超怖い！！

「ごめんごめんごめんごめんごめん！」

ごめんを連呼する。やっと殺気が消える。危ない危ない。

というかそんなこと出来るんだったら自分で走れよ。そう思ったが喋らない。同じ目に合いたくない。

「あの、また一つ気になったんですが」

「また？ 何だ？」

「この塔、こんなに横に長いんですかね？」

「それは知らないぞ。でも、確かに長いな」
長過ぎる。

「それで少し考えたんですが、僕たち、塔から出てるんじゃないんですかね」

「えっ？」

「例えば、この通路は少しずつ、誰も気にしない角度で下に傾いている、とか」

「そんなまさか……」

「もう既に地下に入っているのかもしれないよ」

「それは、ない、だろ……」

突然何を言いですんだ、こいつは。

「ちよつと降りしてください」

碗器を降ろす。バッグをゴソゴソしている。試行錯誤の末、取り出したのは取っ手のついていない筒状のコップ。それを倒して床に置く。俺たちの進行方向と同じほうに少しずつ転がって行くコップ。
「ほら……」

絶句。

碗器はコップを片付け、勝手に俺の肩に乗る。器用だ。猿かお前は。いやいや、そうじゃない。

「じゃあ、俺たちはどこへ向かっているんだ？」

「さあ……」

沈黙。

「取り敢えず、通路は一本だった。だから他のやつらだってここを通ったに違いない。ずっと行けば誰かに会えるはずだ」

剣商人でもいい。とにかく誰か、これを説明してくれる人に会いたい。そう思いながら俺はまた走り出す。

更に1、2時間走ったあと、塔の入り口並みに大きいドアが見え

た。

「出口ですね！」

「そうだな」

また通路が続いてなければの話だがな。

ドアを開ける。中には人がいた。人だらけだった。4千人以上いるんじゃないか？ 殆どが寝ている。ここまで長かったから寝ているのか？

碗器を降ろす。

「何だ？ ここは」

「何なんでしょう……」

「ここは、塔への挑戦資格を手に入れる為の第二次試験場だ」

ドアのそばの壁に寄りかかっているカウボーイ姿の男が言う。

「第二次試験？」

「ああ、どうやら、今年は試験を二回もやるらしい」

「お前は誰だ？」

「おっと、勝手に喋っておいて名乗っていなかったね。俺は、塔の
応戦者、駁撃九激だ」

「応戦者？ 何でここにいるんだ？」

「ここが俺の部屋だ。そして、突然第二次試験場になった」

よく分からない。何を言っているんだ？

「つまり、ここが俺の部屋だ」

それは分かる。俺と碗器は頷く。

「そして、第二次試験場だ」

また頷く。

「だから俺がここにいる」

「あ、そうか」

「自分の部屋にいるのが悪いか？」

そういうことか。

「更にどういふ訳か俺が第二次試験試験官になった。よって只今より第二次試験を行う」

「えっ」
「うんうんうんうんうんうん。おい。」

銃系不拔

「じゃあ、やるか」

そう言って駁撃はベルトに付けている拳銃を右手で握る。

「え、いや、は？」

ひ……ふ……み……。おいおい、こいつ左右3丁ずつ持つてるぞ。真つ当な人間か？ 帯刀しているやつ言うことじゃないかもしれないけど。

「早く構えろ」

碗器い、助けてくれえ。碗器を見る 固まっている。くそ、俺はこつちの世話もしなきゃ駄目じゃねえかよ！

「構えないんなら先に行くぞ」

「待った待った。今、構えるよ」

『空切水斬』に手をかける。

「不拔、鈍足」

駁撃が動いたようには見えない。しかし、何かが飛んでくる。俺

は咄嗟に『空切水斬』で弾く。

「何だ？ 今のは？」

「俺は銃系の不拔使いだ」

「重刑の差別扱いか」

「今のは俺が使う技の1つ、鈍足、だ。俺が持っている技の中で最も遅い」

あれで最も遅いって、じゃあ逆に1番速いのは何なんだよ。

「最も速いのを見たいか。いいだろう」

駁撃は時計を見る。部屋の端にある大きな時計だ。

「よし、丁度いい時間だ。あの秒針が12に来た瞬間に撃とう。あれを壊しても塔の管理人だか支配人だかが用意したストックが10台以上あったはずだ」

応戦者側って結構待遇がいいのか。俺もなってみたくなった。だ

が、あの管理人は苦手だから無理だな。諦めよう。

駁撃は左手で別の銃を握る。

「あと、10秒」

ここから秒針が見えるのがすごいな。俺には見えないぞ。

「9…8…7…6…5…」

カウントダウンするのか。

「4…3…2…1…」

0。

「不拔、神速」

バン、パリーン。と音がする。しかし、誰も動いていない。時計

は……壊れている。

「すごいな」

「今のが1番速い技だ。おそらく、秒針が12のところまで止まっているはずだ」

時計に駆け寄る。秒針は12。

「確かにそうだな」

だとすれば、駁撃は秒針が12になったのを見て、その瞬間に撃つて、1秒以内に当たった、のか？

「なあなあ、12になる前に撃つて、12になった時に当たったんじゃないか？」

「今は疑っていればいい。戦闘になればそれが本当だ、ということが嫌でも分かる」

「へえー」

興味ないな。今日見ないな。でも、不拔は見てみたい。

「他にはどんな技があるんだ？」

駄目元で訊く。

「見せてやるっ」

見せてくれるのか！

駁撃はまた、別の銃を握る。どうやら銃によって使える技が違うらしい。

「不拔、睡魔」

俺に向けて撃つ。

「え、ちょ、待て」

また、咄嗟に『空切水斬』で弾く　ほど速く動けなかったので避ける。銃弾は壁に当たり破裂する。壁は無傷だ。

「なんだ、威力無いのか？」

「ただの睡眠弾だからな」

「まさか、ここに寝ているやつらって……」

「ああ、お前と同じように俺の技を見たいと言って睡魔にやられたやつらだ」

やつぱりな。だからこんなに……。

「だが、心配するな。死んではいけない。寝ているだけだ」

「別に心配なんてしない。赤の他人だからな」

「そうか」

駁撃はまた別の銃を握る。これで右手側の銃は全部使うな。俺も『空切水斬』に手をかけておく。

「不拔、無音」

無音、つてまさか！　俺は銃声が聞こえる前に『空切水斬』を抜く。抜いた瞬間、手応えがあり、弾く。しかし、銃声も、弾いたときにも音が鳴らない。

「無音を弾くか。かなりの腕前だな」

「弾かれたのは初めてか？　ならよかつたな、

「いや、これまでも何十人かは弾いている」

俺が1番最初じゃなかつた……。

駁撃は左手でまた別の銃を握る。俺もまた構える。

「不拔、威嚇」

バン、と大きな音がする。俺は『空切水斬』を抜く。が、手応えはない。くそ、撃たれたか。

「あれ？」

痛くない？

「今のはただの威嚇射撃だ」

じゃあ、技の意味がないんじゃない……。しかもその為だけの銃って……。

「では、次は最後だ」

左手で残った銃を握る。俺も構え直す。

「不拔、連射」

ババババババン！

俺は必死で『空切水斬』を振る。六発ほど弾丸が飛んできた。なんとか全部弾く。

「連射つて一発じゃないんじゃない……。でも技は技か……」

「その通り、技は技だ。今のは六発で一発の技だ」

そんな、無茶な……。

「よし、では今度こそ始めよう」

駁撃は両手で一丁ずつ銃を握る。片手で一発ずつ撃つんじゃないのか……。俺もまた構える。

「何重もの塔、第二次試験。開始！」

居合い系不拔

「不拔、連射、睡魔」

計7発の弾丸が飛んでくる。しかも俺の真正面に。

「だが、それだけに避けやすい！」

ちよつとズレればいいだけなのだから。

後ろの壁に6つの穴を開け、1つが破裂。

「この程度ですか？」 第二試験も大したことないですね」

「何だと！」

逆鱗触れ。師匠の得意技だ。使わせてもらう。尤も師匠には得意技という自覚はなく、逆鱗触れ、とい名前もあいつが付けた。

「不拔、連射、連射、連射、連射、連射、連射、連射」

6×6。計36発が飛んでくる。今度は狙いが1ヶ所だけじゃない。というか、手がブレて色んな方向に飛んでしまっている。駁撃が激情している証拠だろうが面倒だ。

「抜刀、突当り」

『空切水斬』を抜き、突く。計36回突く。1回ごとに弾丸を割る。

「何!？」

どういう反応の仕方だよ!と思いつながら『空切水斬』を鞘に仕舞う。

「不拔、連射、威嚇」

銃声が7発分聞こえる。1ヶ所を狙っている。これなら避けられる。こつから1発で決めよう。俺は上へ跳ねる。駁撃の真上へ。駁撃も俺を見る。

「何!？」

同じ反応かよ!と思いつながら『空切水斬』を抜く。

「不拔、九激：連射、無音、神速、鈍足」

合わせて9発。

「抜刀、電式ひびくし」

これも突当りと同じく突く。上からの攻撃だと名前が変わる。どちらにしろ、銃弾を割り、そのまま重力に従って駁撃も切る。

「ぐはっ」

だからどんな反応の仕方だよ！と思いつながら更に追い討ちをかける。

「あんまり大したことなかった」駁撃さんに「面白いものを見せてあげま〜す」

逆鱗触れ。

「なん…だと!？」

結局、そんな反応ばかりかよ。と思いつながらも、そんな反応ばかりでいいか。と思いつ、止めをさす。

「不拔、脇深致わきみち」

駁撃のベルトに付いている銃を全て切る。

「お前も…不拔使い……」

「そう。居合い系不拔使い。師匠に無理矢理教えられたんだけどね。俺はそんなに不拔は好きじゃない。

「それよりも、俺は合格だよな。ついでにあいつも合格にさせてほしいんだけど」

俺は立ったまま気絶している碗器を指差す。

「いいだろう。お前ら、2人も合格だ」

そう言いつて駁撃は倒れる。電式をもろに食らって、尚立っていたことはすごいな。まあ、結局、俺の勝ちだけだな。

俺は碗器に駆け寄る。

「おい！ 碗器！ 起きろ！ いや、立っているから起きてるのか？ でも、気絶しているから起きてない？ どういうことだ？」

意味分からねえ。

「はっ！」

碗器が動き出す。

「どこだ！ 駁撃！ 出て来い！ 今からこの刃さんがお前を倒す

ぞ！」

俺なのかよ。それにもう倒したけど。

「大丈夫だ。もう倒したぞ」

「はっ！ 駁撃が倒れている！ もしや僕の力で倒したのか！」

「いや、だから俺が……」

「あっ！ 刃さん！ もう心配しなくていいですよ！ 駁撃は僕が倒しましたから！」

自慢げに言ってくる碗器。それを見て何も言えなくなる俺。

「あれ？ でもおかしいですね」

「何がだ？」

「普通、ボスを倒したりすると扉が開いたり、お姫様が出てきたり、次のステージに進めたり、お姫様が偽物だったりするんですけどね」

例が当たっているのかどうかは分からないが確かにおかしい。ここからどうやって進めばいいんだ？

「取り敢えず、今日はここで休みますか。他の方も寝ているようですよ」

そういえばそうだった。俺は周りを見渡す。何人かはこっちを見ている。だが大多数の人間が寝ている。いくら睡眠弾にやられたからって何発も銃声が鳴っていたんだぞ。普通起きるだろう。

「そうだな」

だが、俺も疲れた。今日はここで休もう。

カレーで腹は減ってなかったので俺も碗器もそのまま眠る。

居合い系不抜（後書き）

結局、応戦者が出てきたというのに名乗らなかつた刃。全く自分勝手なやつ（自分が悪いのを誤魔化している。現実回避）。

次はおそらく不穏な影！乞うご期待（してくださいませよう祈っています）！

1日目の晚餐

《今回の挑戦者。如何でしょうか》

スーツの男が言う（塔独自回線の専用チャットで）。翻訳され、それぞれの言語になり、それぞれの人に届く。すぐさま返信する人々。

《生きのいいのが揃っている》

《またあいつは何かやってくれそうだ》

《誰が来ても俺はあの女一筋だ》

《今回こそはあいつにかけて勝ってやる》

《新人がかなりいい》

《刀を持った日本人。筋がよさそうだ。今回はこいつにかける》

《今年は若干少ない。しつかり勝たせてもらわなければ》

数々の返信が送られてくるのを確認するとスーツの男は微笑む。

「フッ」

《では、皆様。お楽しみください》

《1つ質問がある》

《何でしょうか》

《どうして毎年、10月なんだ？ 1月でも2月でも、言ってしまう

えばいつ何時でもいいのではないか？》

《そうだ。俺も気になっていたんだ》

《私もですわ》

《教えてくれ、支配人》

「フッ」

《いいでしょう。ここは僭越ながら私、支配人の行方ゆくえ彼方かなた方がお教え
しましょう》

拍手が起きる。

《10月というのは日本では『神無月』とも言つのです》

《神が無い月？》

《どういう意味だ？》

《一説に過ぎないのですが、出雲大社という所に全国の神が集まって1年のことを話し合う月、と言われているのです》

《ほう》

《なるほど、面白い》

《よって、何重もの塔における支配人、管理人全員で話し合い、神がない月、神頼みの出来ぬ月、自らの力だけで成し遂げる月、という意味合いを込めて10月にした、という噂があります》

《挑戦者だけの力、か》

《ムードはバツチリだな》

《まあ、一説に過ぎませんが、そういう噂があることは確かです》

《なるほど、ありがとう》

《いえ、構いません。これからも何か不明な点があればどうぞ遠慮なく言っていただければと思います》

《分かった》

《オッケーよ》

《では、私はこれで。失礼致しました》

スーツの男　支配人、行方彼方は部屋を出て行く。残った人々は目の前にある豪華絢爛な料理を食べながらパソコンを睨み、時折、キーボードを打っていた。

ここは刃たちがいる何重もの塔の地下深くに存在する、大広間『ビッグ・ザ・ルーム』。

武器解説 〱1日目〱

空切水斬そらぎりみずぎり・ ・ ・ 刃が帯刀している刀。大業物。片刃。長さ、1・2
米。柄の長さ、10・5糎。幅、5糎。重さ、2砵。鞘の色、水色
と青に黒い筋入り。刀身の色、黒。

鈍足どんそく・ ・ ・ 駁撃の銃の1つ。色、黒。最も遅い弾を放つ。
神速しんそく・ ・ ・ 駁撃の銃の1つ。色、白。最も速い弾を放つ。
睡魔すいま・ ・ ・ 駁撃の銃の1つ。色、ピンク。睡眠弾を放つ。
無音むおん・ ・ ・ 駁撃の銃の1つ。色、紫。音が無い弾を放つ。
威嚇いかく・ ・ ・ 駁撃の銃の1つ。色、赤。音が鳴る弾を放つ。
連射れんしゃ・ ・ ・ 駁撃の銃の1つ。色、黄色。六発の弾を放つ。

武器解説 〱1日目〱(後書き)

短い！しかし、物語中で1日が終了した際にこのようなのを毎回、更新していきたいと思います。単位が寸や貫ではないのは、舞台は現代という設定だからです。ご了承ください。

次話は2日目！乞うご期待(してくださるとも泣かないはずです)！

異常事態と強者談義

「刃さん！ 起きてください！」

碗器の音が聞こえる。昨日からこの台詞を聞くことが多くなっている気がする。

「ん？ どうしたんだ？」

俺は起きる。そして周りの異常に驚く。

「な……何があつたんだ？」

昨日、ここに来たときに寝ていた人たちが全員いなくなっている。

「どういことでしょうか、刃さん」

「俺に訊くなよ」

見渡すと俺たちと同じように戸惑っている人は誰もいない。

「掃除人だ。掃除人が塔の外にやったんだ」

誰かが俺たちの後ろで喋る。駁撃だった。

「駁撃さん！ あなたは大丈夫だったんですか！」

「ああ、俺はな。」

「掃除された人は無事なんですか？」

「勿論だ。俺も何度か掃除されたことがあるがその時は傷はおろか骨折して、内臓が破裂していたのに治って塔の外に寝かされていた。

ご丁寧に寝袋に入れて風邪を引かないようにしてあった」

「骨折に内臓破裂って、何があつたんですか？」

「ガキにやられた」

歯軋りしながら言う。相当悔しかったらしい。

「子どもがいるんですか？」

「お前と同じくらいだよ」

「僕、何歳に見えますか？」

「8、9歳？」

次の瞬間、駁撃がフライパンで殴られる。やったのは碗器だ。

「うわっ！」

「失礼ですね！ 僕は15歳ですよ！」

「えええー」

駁撃が頭を擦りながら驚く。

「12月で16歳になります」

「じゃ、じゃあ、お前も15か16なのか？」

「俺は16歳だ」

「俺はまたガキにやられたのか」

駁撃が頂垂れる。ガキって何だ、ガキって。

「ということは8歳くらいの子どもで応戦者の人もいるんですね」

「いる。俺が挑戦してた頃は3人目だった」

「何で挑戦しないで応戦者側になっただんですか？」

「ガキに負けたからだ」

「ふうん」

碗器はあまり興味がないうだ。というか、それ以外のことに興味がいっただようだ。

「あの、1つ訊いてもいいですか？」

「何だ？」

「昨日、あなたは僕が倒しました。なのに、何故もう起き上がってられるんですか？」

「俺はお前にやられた、というかお前と戦った記憶がないぞ」

駁撃も碗器も不思議そうな顔をする。碗器の記憶が間違っている。

「まあ、俺が受けた傷もお前らが受けた傷も全て治っている」

「俺はお前から攻撃を受けた記憶はないぞ」

俺はすかさず反論。聞かない駁撃。

「そこら辺は治療人が治してくれるんだ」

「治療人？ そっちも誰も見たことがないとか言っんですか？」

「ああ、誰も見たことがない。だが、挑戦者も応戦者も傷や骨折、持病、感染症、頼めばアレルギーですら治してくれる」

「頼めばってどうやって？ 誰も見たことがないのに」

「寝る前に紙に『アレルギー治療求む』って書いて枕元において寝

ると朝にはすっかり治っている」

「すごいな」

普通に感心。

つて、そんな話をしている場合じゃないぞ。

「話を戻していいか？」

「えっと、何の話だった？」

「掃除人」

「あー、そうだったな」

「俺はお前を倒したぞなのに何で掃除されないんだ？」

「俺は応戦者だからな。掃除されるのは挑戦者だけだ」

「その掃除人つて誰なんだ？」

「知らない。俺も見たことがない。掃除人だが人じゃないかもしれない。だが、誰もがそう呼んでいる」

人じゃないかもしれない誰も見たことがない掃除人。とてつもなく強そうだな。

「あのさ、お前が知っている限りで一番強いのは誰だ？」

俺は駁撃に訊く。

「あのガキが来る前年はガキに邪魔されないでかなり上までいった。だが、お前と同じような居合い使いがいた。あいつは桁違いに強かった。ガキ以上だな」

「で、その人に負けたんですか」

「悪いか！」

駁撃が碗器に向かって叫ぶ。だが、俺は聞いちゃいない。

「居合いか……。やっぱりここにいるんだな」

俺は咳く。

「何だ？ あいつと知り合いなのか？」

「お前には関係ない」

「あっそ」

もつと食いついて来ると思ったが予想外に全然来なかった。結構、人のことを考えているのか？

「気にならないのか？」

「俺に関係ないことはどうでもいい」
かなり自己中心的なやつだった。

「まあ、更には上は西条東路さいじょうとうろだな。あいつは人とは思えないほど強かった」

「そんなやつと戦ったことがあるのか！」

俺は驚く。こいつ、強いやつと戦ってきているんだな。

「いや、お前くらいのがきの頃、テレビで見たことがあっただけだ。もう顔も覚えてない。だけど、滅茶苦茶に滅茶苦茶強かった」
戦ったわけではないらしかった。紛らわしいやつだ。

「でも、僕は見たことありませんよ」

「そうだろうな。12、3年くらい前から行方不明だ。しかも、10年くらい前に死亡説が流れたんだ」

「それじゃあ、知りませんね」

「他には雷切ってやつも強かったな」

雷切だと!?

「雷切?! 下の名前は割地かつちか？」

「ん? 知っているのか？」

「ああ、俺の師匠だ……」

「妙に言いにくい名前のやつだったし、妙に強かったし、妙に愛刀を粗末に使ってたから覚えてる」

確かにあの師匠は妙だ。

「その時の愛刀は何だったんだ？」

「えっと、俺が戦った時は確か、最上大業物の『火碎地爆かさいちばく』じゃなかったかな」

「『火碎地爆』? 聞いたことないな」

「僕もありません。多分、前の刀じゃないでしょうか」

「前の? 今は違うのか？」

「違いますね」

あの師匠は愛刀に対しての執着がなさ過ぎる。

「ふうん。まあ、今の俺には関係ないな」

「だろうな」

「愛刀と言えば、おいお前！ よくも俺の愛銃たちを！」

愛銃なんて言葉があるのか！？

「あ！ いたいた！ 駁撃さーん！」

遠くから声が聞こえる。俺たちは声が聞こえた方を見る。
剣商人だった……。

異常事態と強者談義（後書き）

2日目突入！これからどんどん強いやつが出てくる予定です！（駁撃も十分強いです）密かに分かりやすいように章分けもしました。他の新連載も始まってしまつて、こちらの更新が遅れるかもしれません。しかし、乞^{せう}ご^ご期^き待^{たい}お^お願^{ねが}い^いし^ます！

研磨

「やっと見つけたよ。駁撃さん。昨日はどうも。いつも通り、掃除人が色々やった所為でどこにいるのか分からなくなっちゃって」

「そうか。だが、あなたは俺には関係ないだろ」

「そうだ。こいつは剣じゃなく、銃だ。」

「いやいや、俺は今年から銃も扱うようになったのさ」

「それはよかった。早速俺の銃を頼みたいんだが」

「えっと、鈍足、神速、睡魔……あと何だっけ」

「連射、無音、威嚇だろ」

俺が言う。そこでやっと剣商人が俺と碗器に気づく。

「おお！ 君たち！ もう縁があつたな」

「あんた、知り合いなのか」

「塔に入る前にカレーを貰ったんだ」

「ふうん」

駁撃は興味なさそうだ。

「じゃあ、これが銃。6丁で120万だ」

「高いですね！」

碗器が驚く。

「当然だ。塔払いで」

「了解！ 毎度、ありがとうございました！」

「じゃあ、俺は少し休む。どうせ、暫くは誰も来ないだろう」

駁撃はそう言うのと部屋の脇の方へ行き、座って銃を磨き始めた。

「そつえば、剣商人さん」

碗器が訊く。

「ん？」

「何で、最初に会ったときに僕らの名前を訊かなかったんですか？」

「え？ あ、ああそうか。いや、だって君たちの名前は知っているからね」

「知っている？」
「どういうことだ。」

「俺は塔公認の剣商人だから、参加者のリストを持っているんだ」
「へえ。でも、誰が誰だか分からないじゃないですか」

「分かるよ。君は刃君だな」

「え、はい」

「何で分かるんだ？」

「君のその刀は『空切水斬』だな。それを持っているのは刃君しかない」

「じゃあ、僕は？」

「君は碗器君」

「碗器が嬉そうな顔をする。」

「背が低く、8歳くらいに見える。これが特徴だな」

「碗器は凹む。」

「ちよつと、刃君の『空切水斬』を見せてごらん」

「剣商人が言う。仕方なく渡す。」

「うん、本物だな」

「当たり前だろ」

「剣商人は『空切水斬』を抜く。刃を観察する。」

「うっん……」

「どうしたんだ？」

「勿体ないな」

「勿体ない？」

「それはどういう意味なんだ？」

「これ、ちゃんと磨いてないね」

「そういえば、手入れを一切していなかった。」

「別に、そんなことをしなくても切れ味は落ちないからいいじゃないか。俺の勝手だ」

「お前の勝手で刀の価値が落ちたら駄目だろ！」
怒られた。

「それに、今は大丈夫でも、この分だとあと一週間で切れ味が一気に落ちるな」

「え？」

俺も碗器も驚く。

「それはどういうことだ？」

「いや、実際は今も落ちてきている。初期状態に比べれば切れ味は5分の1だな」

5分の1！？ そんなに落ちているのか。

「ちゃんと磨かないのが悪い」

剣商人が自分のバツグを漁る。

「確か持ってきてたはずだぞ。えっと、どこだ？」

5分後。剣商人が小さな刀を取り出した。

「これは業物の『研磨』しぎみがきと言ってな、これを使うと切れ味が抜群に上がる。ためしにやってみるか」

剣商人が『研磨』というやつで俺の『空切水斬』を研ぐ。そして磨く。

「これでいいだろう。何か切ってみろ」

俺は『空切水斬』を受け取る。碗器がキャベツを取り出す。

「これを千切りしてください」

碗器からの要望に答えてやろう。俺は『空切水斬』を構える。碗器がキャベツを投げる。

「居合い、裂羅波来」さくらなみき

空中でキャベツを千切りにする、つもりだった。『空切水斬』を鞘に戻す。

「キャベツが……ない？」

碗器が驚愕する。そして俺をどやす。

「刃さん！ 僕のキャベツをどこにやったんですか！ 今日にはトンカツを作る予定だったんですよ！ 縁起を担ぐために！」

だったら、昨日のカレーのときにやれよ！ そうしたらカツカレーになるだろ！

「これはすごいな」

剣商人が感嘆する。

「君に腕はすごい。いくら切れ味を良くしたからって、これは……」
下を向く。つられて俺と碗器も下を向く。

「え、これって……」

「マジかよ……」

螺旋階段

「やっぱり元々切れ味がいい刀なんだよ」

と、下に落ちたキャベツ　というか、どう見てもただの緑の粉を見ながら剣商人が言った。

「切れ味とかそういう問題じゃないと思うぞ。これは……」

こんなものを振り回してたらこの塔だってどうなるか……。

「この『研磨』を碗器君にあげよう」

「え、いや、でもお金は……」

「あげるって言っただろう」

碗器は『研磨』を受け取る。

「これで『空切水斬』をしっかりと手入れしてやりなさい」

「は、はい！」

碗器が敬礼する。

「じゃあ、そろそろ上に行ける時間かな」

「時間？」

その時、天井が開いた。そして、螺旋階段が降りてくる。近くへ寄る人々。と言っても数人しかない。

「何ですか、あれは！」

「1日目は掃除人が掃除をしやすように絶対1人目で終わりなんだ。ここで負けた人が上に上がらないようにね」

「いや、そうじゃなくて。あの階段は何なんですか!？」

「今年は螺旋階段だね」

「今年は？　去年は違うんですか？」

「去年はエスカレーターだった」

「そっちの方が最新……」

碗器と剣商人が話しているのを横で聞きながらも俺の目は螺旋階段に釘付けだった。

「あれは、どうゆう仕掛けだ？」

「さあな。だが、次の奴は機械、というかカラクリ好きでこつこつ
のをやってるんだ」

「すげえな」

「これで70過ぎの爺さんなんだから驚きだよな」

「70過ぎ!?!」

「爺さん!?!」

剣商人が頷く。

「そして、駁撃さんの祖父だ」

「えええええ!?!」

俺と碗器が同時に驚く。

「もう年だから不抜は使えないが、それ以上にカラクリがすごい」

「強いんですか」

碗器が訊く。

「戦ってみれば分かるさ」

剣商人がウインクしながら言う。

螺旋階段が床に着く。一斉に上って行く数人の人々。

「俺が先だ!」

「いや、俺だ!」

「じゃあ、俺が!」

「どうぞ、どうぞ、どうぞ」

何だあの会話は……。

「よし、上るか」

剣商人が先導し、螺旋階段を上る。途中で止まる。

「どうしたんですか?」

「伏せろ」

俺たちは剣商人の言葉に従って伏せる。すると、頭上をさっきの
挑戦者が飛ぶ。

「何が起こってるんだ!?!」

俺と碗器は呆然と見ていた。

螺旋階段（後書き）

またしてもキリが悪いところで終わりました。（続きを気になるようにする作戦と思われるかもしれませんが）

次回の何重もの塔、2人目の応戦者！ 70過ぎのお爺さん！
どんな戦いになるのか！ それまで乞うご期待（してください、純粹に）！

鉄球と名乗り

「よし、行くぞ。ここからは九激さんと訳が分からなくなるから駁撃一世と言おう。分かったか？」

頷く。剣商人の後ろについて一気に上る。勿論、柄から手を離さない。抜きやすいように刀自体を腰からも外しておく。

上りきった瞬間、鉄球が飛んでくる。咄嗟に左手を振って、鞘で鉄球を弾いた。

「ほう。若いもんにしてはやるな」

声が聞こえたほうを見るとそこには、カウボーイ姿の爺さんがいた。爺さんは椅子に座っていた。その椅子の近くには様々なボタンが置いてある机がある。そこに右手を添えている爺さん。確実に鉄球はこの爺さんの仕業だろう。

「わしは駁撃 激^{げき}燐。気軽にゲキリンツ、と呼ぶのだ」
「ゲツ、キリン……」

碗器がボケた。と、思う。天然じゃなかった場合。

「あ、今のさっきの僕は苦手なキリンが嫌いなものにお爺さんが今さつきキリンとか言うからゲツ、となつたんです」

天然だった……。今の説明いらぬよ碗器君。意味を受け取りにくい口調だったよ碗器君。気が動転していないかい？

「おお、剣商じゃないか！」

駁撃一世が剣商人を見つけたようだ。

「駁撃さん！ 1年振りですね！」

剣商人の顔が商売モードになる。のを分かってしまうのは、あまりいいこととは捉えたくない。というか、この爺さんに武器を売る必要があるのか？ 鉄球か？

「今は特に必要ない。また、あとで頼むよ」

剣商人が悔しそうな顔をしながら「かしまりました」と言う。
なんか嬉しい！

「これはわしが作ったのだ」

勝手に駁撃一世が話し始める。

「長くなるぞ。口の中で噛み切らないように舌噛んどけ。眠気覚ましになる」

剣商人が言う。一応、言う通りにする。

「作りを思いついたのは15の頃だったのだ。そこから構想を広げ、練り、検証した。そして、23年もの歳月を掛けて作られたのがこの『崩訪砲』。漢字で書くと、『崩』れが『訪』れる大『砲』なのだ」

「崩れが訪れるんだったらこの大砲が壊れるんじゃ……」

碗器が余計なことを言う。

「そうか！ じゃあ、改名するか。うむ。『宝封砲』でどうだ。漢字で『宝』を『封』じる大『砲』。これなら文句ないだろう」

でも、どう見ても大砲とは思えない。ほぼ戦車だ。

「では、勝負と行こうかな。誰から勝負なんだ？」

「俺だけだ」

俺が言う。

「俺が勝つたらこいつも勝ちにしてもらおう。あんたの孫にはそうしてもらった」

「というか昨日の時点では再起不能にした。剣商人が今日、銃を渡したが碗器のことは忘れていたんだろう。」

「そうか。いいだろう。名乗りをするのだ」

「そういえば、昨日から一回も名乗っていない。別にどうでもいいけど。」

「俺の名は水裂刃だ」

鉄球と名乗り（後書き）

遂に名乗りました。が、あまりインパクトが足りなくなってしまう感じがします。実際にはちゃんと初めから名前は決まっていたが中々紹介することが出来ず、ズルズル引つ張っていった結果、雷切や西条という名前が出てきてしまい、インパクト不足に感じられます。が、しかし！ 水裂刃が主人公！ どんどん、カッコ良く、書いてゆきたいです！ これからも、どうぞ乞うご期待（お頼み申す）！

五番刈

「水裂、か」

「どうした？」

「懐かしい名前と思つての」

「水裂！？」

駁撃一世のいい雰囲気をぶち壊した剣商人の声が響く。

「水裂つて、偶然だよな！」

「何が？」

「この塔にも水裂つてやつがいるんだよ！」

「本当か！」

「かなり強いぞ」

剣商人は興奮している。

「俺たちはそいつに会いに来たんだ」

剣商人も駁撃一世も驚く。碗器は頷いている。

「やつと思ひ出してくれましたか。そもそもの目的はそれですから

ね」

「始めから分かつてるぞ」

失敬な！ あれ、駁撃一世の口調が若干うつつてる？

「でも、あそこまではきついぞ」

「あいつに会わないと俺は師匠に殺される。その方がきつい」

碗器も頷く。

「そんなに怖いのか。お前たちの師匠つてのは」

「怖いなんてもんじゃない。悪魔だ」

「その師匠の名をなんという？」

駁撃一世は知っているのだろうか。とりあえず言ってみる。

「雷切」

「やはりな」

「え、まで全部言つてませんよ」

「よいよい。大抵、そういう噂を出されるやつは相場が決まってるのだ」

「うちの師匠も相場に入っているんですか？」

「最上位じゃな」

「だろうな。あいつはヤバい。」

「よし、じゃあ、そろそろやるか。」

「それにしても大きい大砲ですね」

「ん？ そうだろそうだろ。触ってもいいぞ」

「いいんですか？」

俺が急にゴマすり口調になったのに気づいたのは剣商人くらいだろう。だが、何も言っていない。

俺は大砲に近づく。『空切水斬』の鞘を左手、柄を右手に持ち、前に出しながら礼をする。

「ふむ。いい心がけじゃ。流石、雷切の弟子だな」

「ありがとうございます」

「全然、ありがたくねえよ！」

「では、始めましょうか」

「そうだな」

俺は離れ、刀を抜く。

「居合いじゃないのか？ こいつは」

剣商人が碗器に訊く。

「居合いじゃない技もありますよ」

「ふうん」

剣商人が納得したようだ。

「では、レディーファイト！」

碗器が仕切ってくれる。こっちはありがたい。

「先制攻撃をやるのだ」

「それもありがたい」

俺は駁撃一世に礼を言う。

「では、お言葉に甘えて」

刀を少しずつ入れ直す。

「居合い……」

少しずつ、少しずつ。

「不拔……」

そろそろいいか。

「ごほんがし五番刈！」

顔の前で刃が鞘に入ってカチンと音がする。その瞬間、『宝封砲』が6つに斬れる。

「なっ！」

「えっ！」

「わお！」

駁撃一世、剣商人、碗器までもが驚く。

「いやいや、碗器は見たことあるだろ」

「いえ、僕が見たのは師匠のでしたから、刃さんが出来るとは思いませんでした」

またしても失敬な。

「わ、わしの、わしの、わしの、わしの、ワシの、和紙の、鷲の、和しの、倭死の……」

イントネーションがおかしくなっている。

「わしの『宝封砲』になんてことを！ 弁償してもらっぞー！」

「これが勝負だろうが」

「ぬっっっっ」

駁撃一世は何も言えなくなる。そして、1つのボタンを押す。すると上からまた螺旋階段が降りてきた。

「早く上へ行け！ お前の顔など見たくない！」

「ありがたく通らせていただきまーす！」

「ぬっっっっ！」

駁撃一世は地団駄を踏んでいる。

俺と碗器は悠々と上った。

五番刈（後書き）

どうやら『あいつ』も同じ水裂であることが判明しました。といっても、私は刃の名前を考えるよりも先に『あいつ』の名前は決まっています。いつか『あいつ』が出てきて、名前を言ってくれればず！ それまで（長くなると思いますが）乞うご期待！

あの人

「何だっただ、今の技は……」

剣商人が言う。

「わしの『宝封砲』が……ほ、うほうぼうが……」

「しっかりしてください！ 駁撃さん！」

「そ、そうだ！ 剣商人！」

「なんですか？」

「大砲を売ってくれ！」

「ないです」

「ないのか？」

「ないです。第一、あつたとしても持つてこれません」

剣商人は駁撃を突き放す。駁撃は頼み込むが聞かない。

「じゃあ、諦める」

「諦めますか」

「ないんだっいたらしょうがない。また、作り直す」

駁撃は剣商人が思っていたよりも潔かった。

「それよりも、さっきの技、何なんですか？ 分かりますか？」

「あれは、何年か前にも見たことがあるのだ。水裂だった。それと、雷切。2人ともあの技でわしの大砲を壊してきた。そして3度目だ」

「同じ技なのに気づかなかったんですか？」

「今の、刃という少年。今までで一番鮮やかだった」

「鮮やか？」

駁撃は大砲の切り口を撫でる。

「綺麗に切れている……。おそらく、礼をしたときに切ったんだろ
う」

「え、でも、刀を抜いていませんでしたよ」

「彼も不拔使いなんだろう」

「不拔、ですか」

「実際には抜いているが早過ぎるが故に抜いていないように見える技。いや、業」

「それをあの年齢で使いこなせるとは……」

「彼には才能というものがあるのだろう」

「俺は、あの水裂刃という少年を追ってみます。彼の強さを調べるために」

「それはいいことだろう。だが、剣商人。お前も相当強いだろう？」

「いえいえ、あの人程じゃあないですよ」

剣商人と駁撃が斜め上を見る。

「あの人は、あの人が」

「あの人は、あの人は」

「つまり、最上階のあの人が」

「そうです。最上階のあの人が」

「わしはまだ数える程しか会っていないが、お前は何回も会っているのだろう」

「商売柄、毎年会っています」

「年々強くなっているんだろうな。あの人は」

「そうですね。それでも、自分では衰えたなどと言っているんですよ。あの人は」

「あの人は何故、こんな所にいるのだろうか」

「何やら、計画があるらしいですよ」

「計画、とな」

「内容を話してはくれませんが、何かあるみたいです」

「ほう」

2人は黙る。

「さて、そろそろ俺も刃君を追いますかね」

「来年、結果報告頼むぞ」

「有料ですよ」

「わしの塔払い、まだ残つとたろう。そこから引き落としてくれ」

「承りました」

剣商人は駁撃に礼し、螺旋階段を上っていく。

「若いもんは元気があってよいな。わしももう少し頑張らなくてはな」

そう言って笑う。

剣商人の実力

「刃さん、1つ思ったことがあるんですが」
碗器が螺旋階段を上りながら言う。

「最初は駁撃九激さん。そのお爺さんの駁撃激燐さんですよね」

「それがどうした？」

「では、九激さんの親は誰なんでしょうか」

「え……」

そういえば、誰だ？ 剣商人は爺さんのことを駁撃一世と呼んでいた。そしてその孫が九激。その間もいるんじゃないか？

「じゃあ、次は駁撃二世なのか」

「分かりません」

碗器が知ってるはずないか。でも、また駁撃は面倒だな。

「おい、2人ともー」

声が下から聞こえる。剣商人だ。速い。一気に上がってくる。

「ふう。ここまで5分か。年取ったなー」

「え、5分って、僕たち15分かかってますよ！」

「君たちもまだまだだな」

カチーン。

「何だと！ おいおっさん、何だよそれ」

「まだ修行が足りないと言っただよ」

「よし、競争だ！ 碗器俺に乗れ」

動揺する碗器を無理矢理肩車。

「位置に着いて、用意、ドン！」

「ダッシュ！ 螺旋階段だろうがエスカレーターを逆走しようが走れる自信はあるぞ！」

「や、や、やや、やい、ば、さん、はやややや、すづうううう、

きぎぎ、まますすすすすよおおおおおおおお

「喋ると舌噛むぞー！」

スピードアップ。

「ひゃいばしゃん。ちょまつちえ、ちょまあつちええちゅひゃちゃい！」

何言ってるのか分からない。無視だ。

俺はチラツと横を見る。誰もいない。やっぱり剣商人なんてこんなもんだ。

「じゃあ、これくらいでハンデオツケーか？」

剣商人の声が聞こえる。見ると剣商人は一步もスタート地点から動いていなかった。ナメやがって！

「勝手にしろ！」

俺は怒鳴る。

「オツケー。レッツ、ゴー！」

バン、と音がする。そしてあつという間に剣商人に抜かれる。

「ゴール！ やったー！」

剣商人は次の部屋に着いたのが喜んでいる。大人げない。が、それ以上に俺の実力不足だ。あんなに速い男がいるだなんて。師匠は人間じゃないからまだよかったがあれは何なんだ。あっちも化け物か？

俺はやつと次の部屋に着く。

「疲れた……」

剣商人に負けた所為で余計疲れた。

「大丈夫ですか？」

碗器を肩車していた所為でもあるが、こいつは俺が自分で乗せた。

まだ許せる。

「惨激さんげきさん！」

剣商人が部屋にいた男の元へ行く。俺たちも続く。

「よう、剣商人」

「今年も会いに来ました！」

「そっちは挑戦者か？ 今年は1人目だな」

「まだまだ、10月は長いですけどね」

惨激という男と剣商人は笑う。

「じゃあ、自己紹介だ。駁撃九激の父で駁撃激燐の息子、駁撃惨激だ」

やっぱり二世の登場だ……。

「さて、君の名前も……」

突然、地鳴りがする。

「何だ？ 地震か？」

「いや、これは足音だな」

「え？」

全員が螺旋階段の方を見る。ポン！ という音が似合いそうな感じで青い球体が部屋に入ってくる。

「ボール？ 何でこんなものがここに」

駁撃二世がボールを掴む。その瞬間、ボールが跳ねる。そのまま駁撃二世の顔に当たる。駁撃二世が吹っ飛ぶ。啞然と見つめる俺たち。ボールは跳ね続けている。

ドガガガガガン！ また地鳴りがする。螺旋階段の方からだ。だが、今はボールに気を取られて何が起こったのかわ見に行けない。

「何だ？ このボールは……」

俺は呟いた。

大和忍術

「こいつは……まさか……」

「剣商人さん、知ってるんですか？」

「知り合いにこれを出来るやつがいるんだ」

「出来る？」

「どういう意味だ？」

「これは、大和忍術やまとの1つ、変態」

「大和忍術？」

「変態？」

ボールが空中で止まる。そして、徐々に変形し、人の形になった。どうも、こんにちは。大和忍術支笏湖支部師範、宇比地うひぢと申します

「宇比地……何かで読んだことあります！」

「ふうん」

俺は興味なし。

「支笏湖、だと？」

「はい。それがどうか致しましたか？」

剣商人は悩んでいる。何に悩んでいるかは分からない。

「何で、支笏湖からここまで来たんだ？ ここは阿蘇山だぞ」

「こっつて阿蘇山なんだ。知らなかった。碗器に訊く。」

「えっ！？ 刃さんは阿蘇山だと知らなかったんですか!？」

「どうやら碗器は知っていたみたいだ。」

この宇比地というやつは塔の為に支笏湖から遙々阿蘇山まで来たのか。師範なのに暇なのか？

「最近、大和忍術志願者が少なくて暇になっているのです。君もやってみますか？」

「やらない」

「志願されるならばいつでも修練生になることが出来ますよ」

俺は居合いでやっていくつもりだ。忍術なんて使わない。

「そうですか。残念です」

宇比地は残念と言っておきながら全然残念そうじゃない。

「どうして、ここに来たんだ？」

大切ないいじゃないか、と剣商人が呟いた気がする。何が大切なんだ？

「何重もの塔、というのは強き者が集まっているとインターネットに書いてありました」

忍術使うのにインターネットやるのか！

「忍者は情報が命なのです」

宇比地が勝手に答える。

「だから、ここに来たのか」

あの人に訊かないと駄目だな、と呟く剣商人。あの人って誰だろう。

「大和忍術って何なんです？」

碗器が訊く。俺も気になっていたことだ。

「大和忍術というのは、遙か古代から続く、古き良き善き好き忍術です」

どこが善いんだか、と呟く剣商人。

「私の支笏湖、そして岩木山、霞ヶ浦、甲武信ヶ岳、能登半島、剣山、琵琶湖、比婆山、桜島、雲仙岳に支部があるのです」

「支部？ 本部はどこにあるんだ」

「それはお教えすることは出来ません。修練生になるのですしたら話は別ですが」

つまり、修練生になれば教えてくれるってことか。まあ、修練生になってまで聞きたい訳じゃない。

「残念です」

例によって残念そうに見えない。

「君！ ここで会ったのも何かの縁。一度、勝負して頂けないでしょうか」

俺を指差しながらそう言う。勝負か。悪くないな。

「オツケーだ！ やろうぜ！」

俺は『空切水斬』を構える。碗器と剣商人は俺たちから離れる。なるほど、居合いですか。では、そちらからどうぞ」

居合いに先手を譲るなんて、こいつもまだまだだろうな。

「じゃあ、遠慮せずに。居合い、横断おったん」

スタンダードな居合い。抜いてそのスピードで横に切る。

「大和忍術。超真剣、白羽取」

宇比地は『空切水斬』を止める。

「おいおい、居合いを白羽取るなんて聞いたことないぞ」

「私もここまで速い居合いは初めて見ました。このままでは私は切られてしまいかねませんね」

ですから、と続ける。

「大和忍術。盗み盗り（ぬすみどり）」

宇比地がいなくなる。

「あれ？」

『空切水斬』が放された反動で前のめりになる。が、踏ん張る。

これで倒れるような男じゃない。

「これで居合いは使えませんね」

宇比地は後ろに立っていた。そしてその手には、

「『空切水斬』の鞘！！」

左手を見ると鞘がなかった。

大和忍術（後書き）

今回は色々伏線を張ったつもりです（プロを真似て）。この伏線がどう生きるのか（この物語はどう続くのか）乞うご期待！

既抜

「居合いが使えなかつたら別の技を使えばいいんだ」

俺は『空切水斬』を目の前で構える。同じように宇比地も鞘を構える。

「刃対鞘だぞ。刃が勝つに決まってるだろ」

「それはどうでしょうか。これは『空切水斬』のようですから、意外と違う結果になるかもしれせんよ」

何を言ってるんだか。鞘には可哀想だが、鞘を切つても宇比地の野郎を倒すぞ。

「俺が居合いだけだと思つたら大間違いだぞ。確かに得意なのは居合いだ。極めようと思つている。だが、刀の使い方は色々あるんだ。それを活かした戦い方が尤もあつてるだろう」

「では、やつてみてください」

一々、馬鹿丁寧な奴だ。そんなに斬られたいのか？ それとも『空切水斬』と俺の技に勝てると思つているのか？

「既に抜いてあるから、既抜きばつ。そして、技は普通、居合いでの派生技みたいな感じで使うんだが、今日は特別だ」

突当りや霰式の基本形。

「既抜、逸奔未知いつほんみち」

右手に構える。刃先を真つ直ぐ宇比地に向け、左足を踏み込む。そして、突く。

宇比地は左手に構え、鎧を真つ直ぐ俺に向け、右足を踏み込む。そして、突く。

カーン、と刃先と鎧がぶつかる。

「なっ」

有り得ない。俺の技が当たらないだ！？ いや、全く同じ動きをされた！？

「大和忍術。鏡映し（かがみうつし）」

宇比地が言う。だが、俺はそんなの聞いちゃいない。

「既抜、突当り！」

これは居合いだろうとなかろうと出せる技の1つだ。そして、既抜の中でもトップクラスの速さで突く。

しかし、カン、カン、カン、と刃先と鎧が当たる音がするだけだ。「中々速いですね。私も追いつくのでやっとです。反撃はまだ駄目ですね」

何なんだ、こいつは！ いや、大和忍術つてのがすごいのか？

どちらにしてもこいつは倒さないと。倒して、鞘を出来るだけそのままの状態を取り返す。

「何重もの塔。転じて別名、難渋なる塔。その挑戦者たる者はどれほどの実力なのかを測ろうと思ったのですが、この程度ですか」

「なんだと!？」

話している間も手は止めない。カン、カン、カンと音がする。

「上、下、右、下、上、左、右、下、右斜め上、下、右、左斜め下、中央、右、下、右、上、左、右斜め下、上、左、下」

突然、そんなことを言い出した宇比地。

「この順番で君は突いてきますね」

言われて刃先を見る。ただ、突くことだけに偏って、場所は意識していないかった。上、下、右、下、上、左、下……。

「君は単純。だからこそ、強いのでしょうか。少なくとも常人よりは。だが、私たちはそのような人すらも超越します」

カン、カン、カンと音が鳴り続ける。

「なので、君のような私たちにしてみれば青二才同然の一人ですよ」「なんだとお！」

俺はスピードを更に上げる。だが、宇比地は普通に、片手で、しかも目を閉じて、ピッタリ受けていた。

カン、カン、カン……。

修理帯剣

「やめだ！」

攻撃を止める。同時に宇比地も動きが止まる。

「鏡映しってというのはそういうことか」

「分かりましたか」

宇比地は微笑む。

「では、鏡映しはもう使いません」

「は？」

「この忍術は結構疲れるんですよ。ですから、もう使いません」

「舐めてんのか」

「いえ、私が疲れるんです」

勝手にしてる。

「じゃあ、俺の攻撃で一気に終わらせてもいいのか？」

「どうぞ、ご自由に」

この野郎、微笑みじゃなくて、薄ら笑いじゃねえか。

「既抜、夜躑躅」

足は動かさず、『空切水斬』を十字に振る。

「ほう、衝撃波の類ですか」

よくRPGとかである技だ。カッコイイから練習して習得した。

結構気に入っている。居合いや不抜だと更に威力も速度も上がるんだが、この際は仕方ない。

「大和忍術。超真剣、白羽取」

宇比地が鞘を手放し、両手で衝撃波を掴む。そして、それを投げる。飛んだ先の壁が切れる。

「おいおい、衝撃波を掴むってなんだよ！ 投げるってなんだよ！」

人間業じゃねえだろ！

「私たち、大和忍者は人間以上神同等なのです。私たちにそのような攻撃が通じる訳がありません」

そう言いながら宇比地は鞘を拾う。

「くそお！ 既抜、野躑躅やじつじく」

『空切水斬』を8回振る。8本の衝撃波が宇比地へ飛ぶ。

「まだ自分の不甲斐無さや意気地無さ、そして弱さが分かっていないようですな」

宇比地は溜息を吐く。その瞬間、衝撃波が全て宇比地に当たる。

「やった！ 刃さん、倒しましたよ！」

碗器が喜んでいる。

「何をしゃいでいるんでしょうね、あの子は」

後ろから声が聞こえる。前を向くと宇比地はいない。

「大和忍術。蜃気楼という技ですよ」

後ろを向く。宇比地が俺の真上にいる。そして鞘を俺の頭に真っ直ぐ当てようとしている。

右腕を振って、『空切水斬』を当ててやるぞ！

「無駄です。遅いです」

その言葉通り、鞘が俺の頭に当たる。が。痛くない。宇比地がいなくなっている。

「このまま、君を倒しても面白くないですね。この鞘は返しましよ
う」

宇比地はいつの間にかさっきの場所にいる。そして鞘を投げてる。

鞘を受け取り、腰に差す。

「おい、どづいことだ？」

「その台詞は受け取ったときに言うものでしょう。既に腰に差してからでは、その台詞は活きませんよ」

知るか。

「君の居合いの技を見せてご覧なさい。私が全て受けて差し上げましょう」

宇比地は手裏剣を取り出す。かなり前に手裏剣は見たことがあるが、あれより、1回りも2回りも大きい。

「忍者っぽい物も持つてるのか」

「ええ。私は大業物程度の鞘なんかよりもこの最上大業物の『修理帯剣』の方が強いですし、何より、使い慣れています」

使い慣れていなければなら使えないだろうが。

「では、君。技を出してください。遠慮せずに」

宇比地はせせら笑う。むかつく野郎だ。

「はいはい。最初っから遠慮なんかするつもりじゃないですよ！
始めから飛ばしているに決まってるだろうが。」

「不拔、十六躑躅」

そもそも、不拔という技は『不拔』を書くが、実際は抜いている。だが、動きが速過ぎて傍から見ても抜いたようには見えない。だから『不拔』を呼ばれるらしい。師匠の受け売りだが。

『空切水斬』を抜き、16回振る。当たり前のように、当たり前に16本の衝撃波が飛ぶ。

「16本。弾けない数ではないですね」

そう言って手裏剣の真ん中を持ち、回し始める宇比地。青い絵が一瞬見える。が、そんなことに気を取られる時間はなく、衝撃波は全て手裏剣に当たる。そして全て弾かれる。宇比地の周りの床に何本も筋が入る。十六躑躅で切れたんだらう。

「やはり、この程度のものでですね。無駄な時間を過ごしました。ここで君を倒す時間すら惜しいです。なので、君は生かして置きます。もし、自分が強くなつたと言うのなら支笏湖へ来てください。いつでも相手になります。では、さようなら」

そう言つと宇比地は壁に穴を空け、外へ出て行く。

「なっ！ 待て！」

穴から頭を出して周りを見るが誰もどこにも何もいない。

「くそ、逃げられた」

「君は助かつたんだ」

ずっと黙っていた剣商人が喋り出す。

「は？ 何言ってるんだ、あんたは！ このまま行けばあんなやつ

「一発で倒せたんだぞ！」

少しムキになって言う。しかし、剣商人は平然としている。むかつく。

「今の君にはまだ無理だ。レベルが違う」

「なんだと！」

「だが、この塔を制覇することが出来れば、若しかすると倒すことが出来るかもしれない」

「さっきの人を倒せなかったのに塔を制覇出来るんですか？」

「今のやつは大和忍者内ではかなり上の位なんだ。そんなやつ相手に刃君はよく頑張った方だよ」

でも、俺は負けた。そして、逃がしてしまった。

「やけに大和忍者に詳しいな。どうしてだ？」

「俺の親友が大和忍者なんだ」

決意

「なんだと？」

剣商人の友達、いや、親友が大和忍者だと？

「まあ、親友と言ってもかなり昔の話だけだな」

だが、親友だったことには代わりないだろう。

「ということは、俺の敵だな！」

「いやいや、落ち着け、刃君！」

「俺は落ち着いてるぞ！ 落ち着いた上でこういう判断をしてるんだ！」

「刃さん！ 十分、動揺してますよ！」

碗器に宥められる。なんで碗器は普通のままなんだ？ まるで、剣商人が大和忍者と友達というのを知っていたかのように。

「刃さんと宇比地さんが戦っている間に剣商人さんと話してましたから」

そういうことか。

「で、その親友ってのは誰だ？」

「それは教えられない」

「何でだ？」

「教えられないからだ」

どういうことだよ。

「気にするな。気にしてはいけない」

「まあ、どうでもいいか。誰だったとしても俺が倒してやる！」

「何故、大和忍者を敵視するんだ？」

「何故って、えっと、何でだろう」

自分でも分かってない。

「そうだな……。男だから？」

碗器も剣商人もポカーンとしている。

「1回、負けたんだ。だから俺はあいつ、いや、大和忍者自体をぶ

っ壊してやる」

「勝手にしろ」

「勝手にしてください」

「ノリ悪いな。どうしたんだ？」

「大和忍者なんて壊滅させる意味があるんですか？」

「今のところは分からない」

「分からないって……」

「そういうことにしとけ」

「はあ……」

納得してくれよ。男だろう。

「でも、やめといた方がいいぞ」

「ご忠告ありがとうございます」

剣商人に対して俺は思いつきり皮肉った。つもり。

「でも、俺は男として男なりの二言のなさを見せ付けてやる。分かったか？」

「男に二言はない、とでも言いたいのか？」

「言いたい、じゃない。言った」

「言ったんだったら前言撤回しろ」

「前言撤回」

「そつだ。馬鹿な真似は考えないで塔を制覇することだけ考えればいいだろう」

「さっきの前言撤回という言葉を前言撤回」

「は？ 何を言っている？」

「俺のことは俺が決める。剣商人如きが俺に口出しをしないでほしい。口出しするな。俺はやると決めたらやるんだ。分かったか？」

剣商人さんよお

「勝手にすればいい。だが、大和忍者は相当強いぞしつこいな。」

「その分俺も強くなればいいだろう」

問題解決。

「その為には塔制覇だな」

そういえばすっかり思いっきり忘れて蚊帳の外にしていた、駁撃二世はどこだ？

「駁撃二世も倒さないと塔制覇にはならないんじゃないか？」

「いや、あの人を倒せばそれで制覇だ」

「あの人？」

「そう。今は最上階にいる、あの人」

今は、か。何かありそうだな。まあ、そこまで行けば分かるだろう。

「じゃあ、取り敢えず今は、大和忍者とか、宇比地とか、考えないで制覇だけを目的にすればいいってか？」

「そういうことだ」

いつから、剣商人は俺に指図出来るようになったんだか。

「ま、いつか。では、レッツゴー！」

「ゴー！」

ガキか、と剣商人が呟いた。気がする。

降下

「で、やっぱり上か」

天井を見上げる。高い。駭撃一世のところからここまで結構長かったけどそれ以上だ。

「いや、上じゃない」

「え？」

「ここがどこだか分かってるか？」

「何重の塔じゃないんですか？」

「違う。ここは何重の塔の子分みたいな立ち居地の駭撃塔だ。駭撃

一世から三世までがここにいます。

「じゃあ、ここは本番じゃないのか？」

「そういうことだ。この塔は何重の塔の西側の地下に作られている」

「何でだよ、始めから塔に入れるよ！」

「始めから入れるのは2回目以降だ」

「2回目？」

「ああ、つまり常連さんだけってことだ
常連なんているのか。」

「つまり、こっちはチュートリアルみたいなもんなのか？」

「言ってしまうばそうだな」

つまんねえの。

「初心者モード、難易度低、敵キャラ少、敵キャラ攻撃力低、防御力低、素早さ低、そんな感じだ」

「なんだよそれー」

「お、おい。剣商人。それは失礼じゃないか」

「ん？」

俺たちが声が聞こえた方を向く。駭撃二世が立っていた。

「惨激さん！ 起きましたか！」

剣商人がすぐさま駭撃二世に駆け寄る。

「大丈夫ですか？」

「心配ない。この程度」

駭撃二世は倒れる。

「大丈夫じゃないじゃないですか」

「じゃないじゃないって意味分からない。」

「大丈夫だ。寝れば治療人が来る」

「そういえばそんなやつがいたな。夜行性なのか？」

「でも、それは夜までに生きていた場合ですよ」

「生きてるだろう。もうじき夜だ。大丈夫だ」

「そういえば結構時間経ったな。」

「扉は開けておいた。さっさと行け」

「扉？」

「分かりました。刃君、碗器君、行くぞ！」

「え、あの、え、駭撃二世さんは」

「俺のことは気にするな。早く行け」

「は、はい！」

「行くってどこだよ。」

「俺たちは螺旋階段のところまで行く。が。」

「そうか。さっきの音はこれだったのか」

螺旋階段は崩れ去っていた。

上から見ると辛うじて駭撃一世の大砲が見えるかどうか、というところだ。

「なあ、さっきの扉ってなんだ？」

「駭撃塔から何重もの塔へ繋がる扉だよ」

「どこにあるんだ？」

「駭撃九激さんのところ」

「一番下じゃねえか。」

「じゃあ、どうする？」

あの青忍者野郎、許さねえ。絶対あいつが壊したんだろう。

「俺はここから飛び降りても大丈夫だが君たちはどうだ？」

碗器の顔が真っ青になる。首を横に振る。

「俺もこれくらいなら大丈夫だぞ」

碗器の顔が更に青くなり、汗が滝のように流れる。

「碗器君は出来ないみたいだね」

「あ、あ、あ、あ、当たり前、前です！」

「俺は碗器が乗っていても大丈夫だぞ」

「俺も碗器君くらいなら大丈夫だ。さすがに刃君は無理だろうと思
っていたから心配していたんだ」

「え、ええつと、どういふ話になっていきます？」

「俺の方が碗器君が乗っても安定感あると思うから俺が背負っぞ」

「分かった」

「はい?? 何の話をしているんですか??」

「勿論、ここから飛び降りる話をしているんだぞ」

「心中ですか!？」

「何でそうなるんだよ」

面倒なやつだ。

「剣商人、さつさと行っちゃって」

「言われなくても行くから心配するな」

そう言ったかと思うと碗器を背負い、飛び降りる。

「キヤーー!!!」

碗器の女々しい悲鳴が聞こえる。

ドカン、と音がする。

「おい！ 刃くーん！ こっちは着いたぞー！ 降りてこーい！」

剣商人の声だ。

「りょーかーい！」

『空切水斬』を腰から外し、降りる。

鞘を立てて床と垂直になるようにする。俺って結構平衡感覚ある
じゃん。

そのまま、鞘から床に着く。というか、突く。鞘が埋まる。でも、

俺は無事。結果オーライ。

「おいおいおいおいおい！ 『空切水斬』でそんな使い方するなよ！」

剣商人が怒鳴りながら駆け寄ってくる。その脇にはぐったりしている碗器。

「でも、ほら、壊れてないぞ」

『空切水斬』を抜いて、剣商人に見せる。

「そりゃそうだろう。最上大業物にも通じるぐらいの硬さを誇ってるからな」

今のは青忍者野郎が鞘で戦って硬いのを分かったからやってみた。名前は後で付けよう。

「でも、師匠の刀の方がもっと硬くて、もっと大きくて、それなのに居合い出来てたからな！。まあ、その分、運が悪くなったとか変なこと言ってたけど」

「運が悪くなった？ それってまさか、最上大業物の『いっとつりょうだん一等両断』じゃないか！？」

「あー、そうそう。そんな名前だった」

剣商人だから知ってるのは当たり前か。

「『一等両断』ってのは最上大業物の中でも最高級の刀だぞ。あの刀を使いこなせる人なんて見たことないぞ。確か何年前に剣豪、けんもちきやうさん剣持切傷さんがどこかの誰かと『一等両断』をかけて戦って、負けて、それで降行方が分からなくなっていた武器じゃないか」

「そんな歴史があつたのか」

「あの剣豪、剣持切傷でさえも、使えなかったのに……」

「師匠が使ってる。振り回してる」

「11月になったら会わせてくれ」

何だか、フラグっぽい台詞だな。

「ああ、いいけど。強いやつとしか会わないぞ」

「刃君よりも強い。大丈夫だ」

むかつく。むかついた。

「絶対にいつか勝ってやる」
俺は決心した。

落下

「だけどな、俺は何も考えないで鞘を突き刺したわけじゃないぞ。俺にだって考えはあるんだ」

「ほう。どんな？」

剣商人め、偉そうに！

「今のは俺の全体重を鞘の1点にかけて床を貫いた」

「そんなのは分かっている」

「話を聞け」

碗器は静かだぞ。気絶しているんだろうけど。

「それによって床にどれだけ負担をかけた分かるか？」

「お前の体重分だろう」

「どこに？」

「どこって、ここだろ」

鞘で穴が空いた部分を指差す。

「正解」

「それがどうしたんだ」

「剣商人って馬鹿なのか？」

「なんだと!？」

「取り敢えず、この穴を上から思いつきり踏んでみる」

「そんなことしてどうなるんだか」

剣商人は足を振り上げ（結構体が柔らかいようだ）一気に踏む。

「で？ どうなるんだ」

「すぐわかる」

碗器を背負う。早く起きろよ。

地鳴りがする。いや、正しくは床鳴りか？

「よし、来たな」

その途端、床にヒビが入る。

「お、おい、まさか、そりゃないよな」

「そりゃあるかもよ」

俺は笑みを浮かべる。

「おいおい、何だその不敵な笑みは……」

失礼な。満面の笑みだろうが。

そう言う暇も隙もなく、床が割れる。

「これで助かったらお前殺すぞ！」

助からなかったら死ぬんだろ。そしたらどっちにしても同じ運命じゃないか。

「嫌だね！」

「大体、こんなの有り得ないだろ！」

「いやいや、有り得てるんだからもう遅い」

「普通、起こらないだろうが！」

「もう起こってる」

「何でこうなるんだ！」

「こうなったから」

そういえば、駁撃二世のところから一世までは青忍者 通称、

宇比地（逆だったか？）が螺旋階段を壊してたけど、一世と三世の

間は見てなかったな。見てからやってもよかったのか。間違えた。

「あ、でも見てからだとヒビを入れるくらい強い衝撃を与えられ
ないか」

これが正解だな。

「お前、何言ってるんだ！ この状態分かっているのか！？」

「飛んでるな。遂に人間は鳥になつたんだ」

なんてロマンチックな！

「んな訳ねえだろ！ どう考えても落ちてるだろ！」

「楽観的に大らかに考えれば鳥になつたんだろ」

「この状況で楽観的に考えられる訳がねえだろ！」

「若しくは落花生の気分だな」

「落ちてるの認めたな！」

「降りているという表現がふさわしいな。まるで神が天から降りて

くるかのように！」

因みに俺はギリシャ神話が好きだ。

「これは降臨じゃねえぞ！ 大体、俺はあんな神じゃねえ！」

「じゃあ、どんな神なんだろうか」

「知るか！」

「商人だから、ヘルメスだったかな」

「知るか！」

「確か、ヘルメスは商人の神と同時に盗人の神でもあったな」

「そんな矛盾は知らないぞ！」

「俺の記憶はボンヤリしてるからな、分からない」

「じゃあ、始めから言うんじゃない！ 今、この状態を抜け出せる

方法を考える！」

「そういえば、俺は碗器を背負っている。つまり、剣商人よりも重い。なのに何で剣商人は俺の隣で同時に落ちているのだろうか」

「そんな哲学みたいなことはどうでもいいんだよ！ この危機的状況を打破する方法を考える！」

はあ、五月蠅い商人だな。押し売りばかりしているんだろう。

そんな時　つまり、俺と剣商人と碗器が駁撃一世のところから駁撃二世のところまでを落下状態にある時。又は、俺と剣商人が談話しながら落下している時。若しくは、碗器がそろそろ目覚めようかと手が動き始めていた時。更に、瓦礫が俺たちと共に階下へ落下している時。

「不拔！ 睡魔！」

そんな声が聞こえた気がする。銃声が3回鳴り、更にもう1回鳴る。

その瞬間、俺は何か打たれた感覚がし、急激に眠くなり、落下状態のまま寝てしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9564x/>

何重もの塔

2011年11月22日03時16分発行